
アタシがアンタの自殺を止めます！！

ある日のあひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アタシがアンタの自殺を止めます！！

【Nコード】

N3033Y

【作者名】

ある日のおひる

【あらすじ】

生きる目標無し、人生に意味なんて無い。世界はくだらないと思っ
っている高校一年生、夢谷信哉。その前に現れた、自殺願望が感じ
取れる能力を持った女の子、時田可憐に、銃を向けられ人生最大の
衝撃的な？ 出会いをする。はたして信哉はこれからどうなるのか
？ 可憐の目的は！？

第一話 出会い。(前書き)

感想、アドバイス、気になる点、気軽にお願いします

第一話 出会い。

桜の舞う季節、窓の外に目をやれば、校庭にある桜の木が花びらを散らしていた。

俺は、ただの県立高校に入学した。別に高校に興味があった訳じゃないが、働くのは、嫌だったからだ。今日は、入学式の次の日、一時間目、内容は、ホームルーム。右はじから、順番に自己紹介の真っ最中だ。

「——です。よろしくお願いします。」

「次」

はあく次は、俺か、ここは、普通に流しておくか。

「はい 夢谷^{ゆめたに} 信哉^{しんや} 趣味なし 特技なし よろしくお願いします」

そして、自己紹介も終わり、何事も無く、その日の学校が終わり、俺は、上履きを脱ぎ靴に履き替え、校門へと向かって歩く。俺の事なんか誰一人覚えて無いだろうな、まっ、友達なんか要らないけどな。はあくくだらない世界だ。

「死にて〜」

俺は、『その』な言葉を口にした。今思えば、そのの言葉がアイツを動かしたのかもしれない。

「やつぱり ちよつと！ 夢谷信哉！」

俺の背後から、俺の名前を呼ぶ女の声がした、そして、俺は、振り向いた。

「あっ？」

「あぐっ！？」

そこに居たのは、美少女と言っても、おかしくは無い、女子が居たが、その行動は、まるで『やくざ』だった。その女子は、俺が振り向いたら、いきなり、右手を伸ばし、俺の口に拳銃のようなモノ

をツツコミやがった。

「ふぁ、ふぁするんだ、ふいきなり（何するんだ、いきなり）」
どよどよどよ

辺りに居た、数人の生徒が困惑している。

「ちよっと、アンタ達、騒がないでね、騒ぐと、穴が開くわよ」

そう言うときイツは、残った左手で髪をかき分け、周りの生徒に怖い笑顔で言った。

「さてと、夢谷信哉 アンタ死にたいんでしょ？」

俺に質問するイツは、鋭い眼で俺の眼を見るがどこか、その眼は寂しげだった。

「ふおっと（ちよっと）落ち着けて、どうふえ（どうせ）ソレ偽ものだろ、大人しく、口から離せ。」

「偽物かどうか試してみる？」

「……………変わらない」

そしてイツが右手の人差し指に力を入れた。

（パァン！）

「!?」

イツが引き金を引くと乾いた音が辺り一帯に響き渡った。そして、俺の口から銃を出すと銃口から、米国の星の入った旗が出ていった。

「もっと、本物ばいの買えば良かったかしら。」

「ふう〜やっぱ偽モンか、それにしてもエアガンやガスガンだったら、病院行きだぞ——」

そしてイツは、俺の腕を引っ張り、歩きだした。

「ちよっと、これからアタシに付き合いなさい！」

「何なんだ！？ お前は？ 一体何がしたいんだ？」

「お前じゃ無い、アタシは、時田^{ときた} 可憐^{かれん}よ！」
こうして俺と可憐は、出逢った。

つづく

第一話 出会い。（後書き）

感想、アドバイス、気になる点、気軽にお願ひします

第二話 アタシの『能力』（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第二話 アタシの『能力』

俺は、学校から出ると、時田という奴に、近くの喫茶店に連れて行かれた。

「ご注文は、お決まりでしょうか？」

「アタシは、カフェオレ、アンタは？」

「カプチーノ。」

「はい、かしこまりました。」

んで、飲み物が着き、俺は、一口カプチーノを飲み、話を切り出した。

「え」と、時田って言ったよな、さっきの学校でした事は、何だ？
どうして俺を此処へ連れて来た？」

俺は、時田に向かって質問をした筈だった。

「それより、アンタ死にたいの？」

（質問に対して質問で返すのか？ コイツは、しかも何だこの質問は）

「質問に答えなさい、死にたいの？ 死にたくないの？ どっちなの？」

時田の目は、真剣だった、そして寂しげだった、だから俺は、今まで誰にも言わなかった事を時田に言った。

「どうでもいいんだよ、死のうが、生きようが、この社会、世界は、くだらない。俺には生きる目標も、意味も持ち合わせて無い。」

「アンタ、家族は？」

「小さい時に二人とも死んだよ。」

「あんた『も』大変なのね。」

時田は、そう言つと、俺の顔を悲しそうな顔をして見た。

「そんな顔で、俺を見るなよ。」

「えっ？」

「今、俺の事可哀そうな奴だと思つただろ、そう言つのが嫌いなんだ俺は。」

「ごめん、そんなつもりじゃあ……」

そう言つと時田は、少し下を向いた、ただの、頭がパーの奴ではないらしい。俺は少しほっとした。

「で、こっちの質問にも答えて貰おうか、さっきの学校でやった事は、何だ？ イタズラにしちゃ度が過ぎるぞ」

「イタズラ何かじゃない、アタシは、アンタが生きたいんだか、死にたいんだか分からなかったから試しただけよ！」

時田は、初めて逢つた俺に対して、熱い口調で言う。

「何で、初めて会つた俺にそんなに構うんだよ」

俺がそう聞くと、時田は、口を開き答えた。

「信じてくれないかもしれないが、アタシは、ある能力が使えるんのよ……」

「能力？」

「うん、アタシの能力は、他人の『自殺願望』が感じとれるの。」

「それは、余り便利とは言えない能力だな、でもおかしいだろ、俺から自殺願望が感じられたからって、あんな事をするか普通？」

「いや、違うの、アンタは、普通の自殺願望がある人と違う感じがして、なんて言ったらいいかしら、例えば、普通の人が白だとしたら、自殺願望のある人は黒だとすると、アンタには、何も無いのよ、色が無い、そんな、普通じゃない感覚を感じ取ったから、アンタが生きたいか死にたいのか、確かめようとしたの、結局アンタの感覚は変わらなかったけど……」

成程、そう言う事が、色が無いか、あながち間違っただけかもしれないな。

「別に信じてくれなくても良いわよ、いきなり、こんな事を言われて、信じれる方がおかし——」

話しをしている最中、時田は、窓の外を見て口を止めた。時田の目は、見開いて女の子を追う。

「ん？ どうした時田？」

時田の視線を追うとそこには、俺達の通っている制服を着た女子生徒が歩いていった。

「時田の知り合いか？」

「あの子、危ない、死ぬつもりだ、それもすぐに。」

そう言うとき時田は、立ち上がり、出口へ走って行った。

「おい！ 待てよ、時田！」

「ごめん、会計ヨロシク、アタシ行かなくちゃ！」

時田は、喫茶店を飛び出して行った。

「釣りは要らない！」

「お客様！？」

千円札をレジに置き、俺も時田の後を追って喫茶店を飛び出した。

つづく

第二話 アタシの『能力』（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第三話 隠れた頭脳（前書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願いします。

第三話 隠れた頭脳

「おい待てよ、時田！」

喫茶店を飛び出して行った、時田を追いかけると、近くの交差点でキョロキョロしている、時田に俺は、追い付いた。

「ああん、もう、見失っちゃった！」

「何だ、さっき喫茶店の窓の横を通った女の子がこれから、自殺しようとしてるとでも、言うのか？」

俺は、時田のさっきまでの言動と行動から推測して、時田に聞いた。

「ええ、そうよ、あの感じだとすぐにでも、自殺してしまいそうだったわ」

「お前の能力って奴で場所とか分かんないのか？」

「近くに居ないと、感じられないのよ、アンタも同じクラスで、近くで感じ取ったから分かったの！」

あつ、コイツ、俺と同じクラスだったんだ、気付かなかった。

「早くしないとあの子が……」

頭を抱えてる時田。

（待て、考えろ、あの子は、これから自殺しようとしているんだよね。学校が終わって、もう大分経つ、これから自殺するよう人がわざわざ入学式の次の日に学校へ来たと言う事は、自殺の原因は、学校以外の何か？ 家庭か？ 家庭が原因なら、自宅で自殺する可能性は低い、時田は、今すぐにでも自殺してしまいそうと言っていた、さっき喫茶店の横を通った時は、手には何も持っていなかった、て事は、道具は使わなくて何か、道具を使わない——飛び降り……

この辺りには高い建物は、無い。——車へ身投げ……死亡率が低い——どうせ死ぬなら、もつと確実に——」
「分かった！ 時田コツチだ！！」

「えっ！ ちょっと！？」

俺は時田の腕を掴んで一目散にある場所へと走った。

「分かったって、何が分かったのよ！？」

「さっきの子の居場所だよ、状況からして、場所は家じゃなく、道具の要らない、ここから徒歩で行ける場所で、死亡率の高い自殺と言ったら、踏切しかない！！」

（何、コイツ、さっきまでのあの情報だけで、場所を当てたの！？）

「今は、走れ！」

「はあ、はあ、はあ、はあはあ、はあ、はあはあはあ」

そして俺達は、踏切から百メートル程の所まで来ると、踏切の近くに1人、制服を着た女の子が居る事を確認した。

「あれだわ！ きつとあの子よ！」

カン、カン、カン、カン、カン

女の子を見つけたが、踏切が鳴り始め、バーが降り始める。線路には、女の子が立っている。

「駄目！ 間にあわない！」

時田がそう叫ぶ声が、聞こえた。俺は、すぐそばの自販機に止まってあった、バイクを見つけた。

「おっさん！ ちょっと借ります！」

「おっ、おい、坊主！？」

自販機の横でコーヒーを飲んでいた、おっさんのバイクにまたがり、俺は、アクセルを全開で、踏切へバイクを飛ばして行った。左

からは、もう目視出来る位に、踏切に電車は近づいていた。

（ブオオオオオン！！）

「くそおおおまにあええええ！！」

（バァギイ！）

「えっ！？」

バーを折って、踏切の中へ入ると、俺は、涙を流して立っていた女の子を掴み、間一髪電車から避け踏切から逃げたが、上手く止まる事が出来ず、横転し女の子を庇うようにして転がった。

（ゴロゴロゴロゴロゴ！）

「痛ててててててて」

（キィィィィィー）

俺達の事に気づき、踏切を通過して、電車が止まった。

「何してんだろ？ 俺……」

つづく

第三話 隠れた頭脳（後書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願いします

第四話 助けた俺、止める彼女（前書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願いします。

第四話 助けた俺、止める彼女

「何してんだろ？ 俺……」

俺は、仰向けに女の子を抱きかかえ、日が暮れかかったの空を見て、呟いた。

「夢谷——！大丈夫——！？」

俺の名前を呼びながら、時田が、俺の元に走って来た。

「痛ててて、ああ、何とかな」

俺は、ゆっくりと女の子を地面に置き、傷ついた体を起こし立ち上がった。

「その子は、大丈夫なの？」

「ああ、ちよつと気絶しちゃったみたいだから、多分大丈夫だと思うけど、取りあえず、時田、救急車を」

「うん、分かった」

俺が頼むと、すぐ時田は、119番に携帯で連絡した。

「もしもし、救急車をお願いします場所は——」

時田が救急車を呼んでいる時、俺は、女の子の手や足を見ると、あちらこちらに、変なモノを見つけた。

「コレは……」

「うーん」

女の子が声を出し、少し体が動いた。

「！？ おっ、おい、大丈夫か？ おい？ 今、救急車を呼んだから、少し安静に——」

「救急車——！？」

女の子驚いた顔をして、急に立ち上がった。

「だっ、大丈夫、私、怪我なんてしてないし、ぼーとしてて、間違っ
つて、線路に出ちゃって……」

女の子は、とても焦っている様子だった、そして、自殺の事を誤
魔化そうとしていた。

「じゃあ、ごめなさい！」

そう言つと女の子は、その場から、走り出した。

「待て！……ぐっ……！」

俺は、すぐ、追いかけようとしたが、さっき足を少し捻つたらしく
すぐ走り出す事が出来なかった。

「ちよつと、何してるのよ！」

時田が、携帯を切り、女の子を追いかけた、30メートル程走つ
た所で、時田は女の子の腕を捕まえた。俺も少し遅れて、その場へ
駆けつけた。

「離して！ 私これから行かなきゃいけない所があるんだから」

女の子は、必死に時田の腕を振り払おうとするが、時田は、女の
子の腕をがっちり掴んで離そうとしなかった。

「離さないわよ、アンタ、また自殺するつもりでしょ、だから離さ
ないわ！」

「！？」

「別に自殺なんてしないわよ、さっきのは、ぼーとしてて……」

「じゃあコレは何だ？」

俺は、女の子の腕を掴み制服の腕の裾をめくった。

「やっ、やめてー!!」

その腕には、青あざや、煙草の押しつけた火傷の跡などが腕いっ
ぱいに付いていた。

「さっき、気絶してる時に見つけたんだ」

「うっう、うっううっう」

女の子はその場に泣き崩れた。

「病院には行きたくないの、警察にも言わないでお願い……」

「分かったわ、病院は、取りあえずいいわ、警察にも言わない、だから、これから私の家に来て、何があったか話してちょうだい。」

そう言つと、時田は、泣き崩れた女の子に右手を差し出した。

「アンタ、名前は？」

「……七尾 由実（ななお ゆみ）……」

「分かったわ、七尾由実、『アタシがアンタの自殺を止めます!!』」

「

つづく

第四話 助けた俺、止める彼女（後書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願いします

第五話 頼もしい電話（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第五話 頼もしい電話

それから、俺、時田、七尾さんの三人は、ここから近くに在ると言う、時田の家に向かった。

「時田、大丈夫なのか？」

「何が？」

俺は、歩きながら時田に聞いた。

「救急車呼んじまったんだろ？ 電車も止めちったし、俺、バイク、パクちゃったし……」

「ああ、それなら、問題ないわ。」

そう言つと時田は、携帯を取り出し、ある所へ電話をかけた。

（プルウ、ガチャ！）

「はい！」

（早！）

時田が電話をかけるとすぐに、繋がり、元気の良い男の返事が聞こえて来た。

「ああ、シゲル、アタシ」

「はい！ 何の御用ですか？ 可憐さん。」

「実は――」

これまでのあらすじを説明する、時田。

「分かりました！ もみ消せば良いんですね？」

「うん、そういう事、任せたわよ、シゲル。悪いわね。」

「いいえ！ お任せ下さい！　じゃあ、すぐ取りかかります。」

そして携帯を切れた。俺は、聞いていた携帯の内容をもう一度確認した。

（もみ消す？　アレを？　どうやって？　正当な方法じゃ、無理だよな、となると……）

「おい、時田？」

「ん？　何、夢谷。」

「今のシゲルって奴は、一体何者なんだ？」

俺がそう聞くと、時田は、俺の肩に手をの寄せ、笑顔で言った。

「夢谷君、世の中には、知らなくても良い事が、沢山在るのよ」
それを聞いた俺は、これ以上シゲルの事を聞くのをやめた。

そして、俺達が十分弱程歩くと、綺麗な外装の三階建のアパートに着いた。

「このアパートよ。」

時田が三階の一番端の部屋の前へと案内する。

「ここがアタシの部屋よ、入って。」

「ああ、お邪魔します。」

「お邪魔します。」

初めて入る、女子の部屋で、時田の部屋は、とても綺麗だったが、俺のイメージの女の子って感じはしなかった。

「取りあえず、お茶でも出すわね、テーブルに座ってて」

俺と七尾さんは、お茶が来るまで、無言で待っていた時、俺はある『モノ』が目に入った。壁際に在った、本棚の上に在った写真立てに入っている写真だ、今の時田よりも幼い時田が、同じくらいの女の子と、笑顔で写真に写っていた。

「はい、お茶。」

「!？」

お茶を持ってきた、時田に写真を見ている事が気づかれると、時田は、お茶を置き、黙って写真立てを写真が見えないように伏せた。そして、時田は、何事も無かったかのように、俺と、七尾さんの前に座り、話を切り出した。

つづく。

第五話 頼もしい電話（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第六話 秘密の天井裏（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第六話 秘密の天井裏

俺と、七尾さんの前に座り、話を切り出す時田。

「七尾さん、どうして、自殺しようとしたの？ きつと、その傷と関係在るんでしょ？」

七尾さんの目を見てストレートに聞く時田。少し黙りこむ七尾さん。

「……………実は——」

やっと七尾さんが固い口を開き始めた。

「この傷は、腕や足だけでじゃなくて、体中に沢山在るの……………」

「誰にやられたの、そんな事を」

時田のその言葉のには、俺には、怒りのようなモノを感じられた。

「ぎ、義理のお父さん……………」

「母親は、どうしたんだ？ 黙って見てるのか？」

俺が七尾さんに聞く。

「お母さんは1年前……………私がまだ●。高校に入学したばかりに病気で死んじゃって……………それより2年前にお母さんが再婚した義理のお父さんに殴られたりするようになって、児童相談所や警察に話してもお父さん、そんなときだけ愛想良くして相談所の人が帰ったらまた私を殴って……………もう耐えきれなくて、さっき学校の友達に最期に会ってきて、それからあの踏切でもう死のうって、楽になりたいの……………！う……………う……………」

「やっぱり、児童相談所や警察は、使えないわね。」

「組織で動いているから、行動が遅いんだよ、動くのは決まって何かが起こった時だ」

「すーはー」

時田は、深呼吸し、立ち上がり、テーブルに両手を思いつきり着いた。

「バン！！」

「七尾さん！ アナタ生きいの？ 生きたくないの？ 死にたいの？ 死にたくないの？ どっちなの！？」

時田の声が、部屋に響き渡った、時田は、七尾の目を見て離さなかった。俺は、そんな時田の目から離せなかった。

「わつ、私は……死にたくない！ 生きたいですー！」

七尾さんの声も響いて、それを聞いた、時田は、こう言った。

「『消えたわね、自殺願望が』」

「え？」

「じゃあ、アタシに任せなさい！ そのオヤジを何とかすれば良い訳ね、七尾さんにとってそのオヤジは、居なくなった方がいんですよ？」

「そうですけど、無理だよ、あの人は、元ヤンキーで体も大きいし貴方じゃとても……」

「心配しないで私に考えがあるから、今の時間、そのオヤジは、家に居るの？」

「ええ、今……」

七尾さんは、時田の部屋に掛っていた時計を見た。

「今、七時を回った所だから、多分家に居るわ」

「じゃあ、七尾さんの自宅の場所を教えて」

「分かった。」

そして七尾さんは、家の鍵と自宅の地図を書き時田に渡すと、時田は、台所からココア持つて来て、七尾さんに渡した。

「はい、七尾さん、少し寒いでしょ、温かいココア」

「あつ、ありがとう、時田さん」

「あと、七尾さん、そのオヤジは、右利き？ 左利き？」

時田が、ココアを飲んでいる、七尾さんに聞いた。

「右利きだけど、どうして？」

「ちょっと、知りたかったのよ。」

七尾さんがココアを飲んで少し経つと、七尾さんは眠ってしまった。

「ふう〜やっと、薬が効いたわね」

「お前、ココアに睡眠薬でも入れたのか？」

「そうよ、自殺願望は消えたけど、アタシが帰ってくるまで、何かあるか心配だからね。アンタ、結構、頭が回るわね、説明する手間が省けて助かるわ、七尾さんをベッドに寝かせといて」

言われた通り、俺は七尾さんをベッドに寝かせていると、時田は、脚立を持つて来て、部屋の隅へと置き、上って行った。

「俺は、今、お前が何をしているのか、全く分かんが、これからどうするつもりだ？ 何か考えが在るらしいが、一体何をするつもりだ？」

「よつと！」

「ガタ！」

「えっと、コレで良いかな？」

時田の部屋の隅の天井が正方形に外れると、時田は、そこから、ある『モノ』を取り出した。

「お前それ……」

「ああ、これね、『トカレフ』だけど、どうかしの？」

そういう言って、脚立の上から、『トカレフ』を俺に見せつける時田。

「どうかしたのじゃあねーよ、何で、女子高校生のアパートの屋根裏から、カタギじゃない方にポピュラーな銃が出てくんだよー！」

「自分の身は、自分で護る、これは自然界の掟よ。」

（何を言っているんだコイツは！？）

「ここは、日本だぞ！ 銃刀法違反で捕まるぞ、お前！」

「大丈夫、大丈夫、心配ないわ、見つからなければ、捕まらないから」

脚立から降りて、笑顔でにこやかに言う時田。

「お前、それで、七尾さんの義理の親父を殺すつもりじゃ無いだらうな」

俺は、マジで心配になってきた。

「殺しは、しないわよ、ただちよっと、手荒い事になるけど、アンタ手伝ってくれる？ この方法は、1人じゃ出来ないの、でも無理にとは言わないわ。」

時田は、真剣な口調と眼差しで俺に聞いた。

「分かったよ、手伝うよ、お前1人で行かせると、殺人事件として、明日の朝刊の一面を飾りそうだからな」

自分でも不思議だった、俺がこんなに他人の為に動くなんて、自分でも驚きだ。

「じゃあ、アンタの役割を説明するわね」

俺は、作戦の大体の流れを時田に説明され、必要な物を買い、俺と時田は、七尾さんの家と向かった。

つづく

第六話 秘密の天井裏（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第七話 クリーンヒット（前書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願いします。

第七話 クリーンヒット

今、俺と時田は、七尾さんの家の前に来ている。俺の右手には、先ほどスポーツショップで買った来た金属バットが握られている。七尾さんの自宅は、住宅地に在る一戸建ての家で、明かりが付いていて、テレビの音も聞こえてくる、どうやら、七尾さんの義理の親父は、家の中に居るらしい。

「いい？ 打ち合わせ通りよ、でも、ヤバくなったらアンタは逃げなさい」

「ああ、考えとく、それより、上手く行くのか俺は心配なんだが」

「心配しなくて良いわよ、人間、アンタが、思っているよりも頑丈だから。」

そして、俺は、玄関のドアノブにそっと手をかけた、七尾さんから鍵を借りて来たが、その必要は無く、鍵は、開いていたので、俺と、時田は、ばれない様にそっと、家の中のテレビの音が鳴るリビングへと向かって廊下を歩いた。

（ドクン、ドクン、ドクンドクン）

心臓が高鳴る、バットを持った右手が震える。後少しでテレビの音が鳴るリビングと言う所で、廊下のフローリングが鳴ってしまっ

た。

（ぎしっ！）

「んっ！？ 由実、帰ってきたのか？ 今日、帰ってくるのが遅いじゃねえか、飯の支度もしてねえし、これはお仕置きが必要か？」

不気味な低い声が、家に響く、俺がリビングのドアを開け少し開けると、ソファーに座り、酒を飲んでいる、体の大きい男が居た。

あいつだな、俺は、小さな声で、時田に言った。

「じゃあ、行くぞ」

「うん」

ドアに手をかけ、俺は、心の中で、数を三つ数えた。

3……2……1……0!!

（ガラー!!）

「うおおおおおおお!!」

俺は、リビングのドアをいきよい良く開け、オヤジの元へ突っ込んで行った。

「!?! 何だ、このガキ!?!」

俺は、オヤジに向かって、バットを振り下ろすが、焦っていたせいか、外してしまった。

（ビュッ!）

「くそ!」

俺の役目は、コイツを『気絶させる事』、だから、俺は、もう一度バットを構えて、振り下ろそうとしたが、この親父は、テーブルに在ったビール瓶で、俺の頭を殴りつけた。

（ガシャーン!!）

「ぐあ!」

ビール瓶は割れ、俺の頭に中身がかかる、そして俺は、痛さの余り、バットを手から離してしまった。

「カラン、カラン、カランカラン……」

「死ね、このガキヤーーー!!」

もう一度、ビール瓶で俺を襲おうとする、オヤジに俺は、体を押し込んで壁際まで、持っていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

そこへ、俺が、落とした、バットを拾って、そのバットで、時田がオヤジ目かけ、振り下ろした。

「眠れこのブターーー!!」

（ドォォン！！）

「ぐはっ」

（バタ！……）

時田が、振り下ろした、バットがオヤジの頭にクリーンヒットし、鈍い音が部屋に響き、オヤジは、その場に倒れ込んだ。

つづく

第七話 クリーンヒット（後書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願いします。

第八話 実現されるシナリオ（前書き）

感想アドバイス、お願いします。

第八話 実現されるシナリオ

時田が振り下ろした、バットが、頭に当たり、七尾さんの義理の親父は、その場に倒れ込みんだ。

「バタ！」

「痛ててて、このオヤジは、ちゃんと気絶したのか？」

俺は、血が出ている頭を右手で押さえながら、時田に聞いた。

「ええ、いいトコロに入ったから、ちゃんと気絶したみたいよ」

時田は、オヤジの口に手を当て確認しながら言った。

「それより、アンタ、頭大丈夫？ 結構、血が出てるわよ？」

「ああ、何とかな、少しふらつくが、大丈夫そうだ、それよりこれからどうするつもり何だ？ この後の事は、まだ聞いて無いぞ」

「そうだったわね、まだ、言って無かったわね」

「ガサガサガサ！」

時田は、近くに在った、タンスを開け、何かをしていた。

「これで、良しと」

そして、時田タンスを閉め、立ち上がり、俺にこれからする事を説明し始めた。

「夢谷！ これから、このオヤジをブタ箱に当分入れるから」

真面目な顔で、俺に話す時田。

「ブタ箱？ 刑務所か、でも、どうやって？ この状態で警察呼んだら、捕まるの俺らだぞ。」

「大丈夫よ、シナリオは、こう、私と七尾さんは、友達で、七尾さんに会いに、家に来たら、このオヤジに襲われ、その悲鳴を聞いて駆けつけた、アンタがこのオヤジやつつけた。」

こんな感じよ。」

「確かに、シナリオにしては、まあまあ出来ているが、それだけじゃ、説得力に欠けるし、恐らく、実刑を食らっても、そう何年も刑務所に入ってられないんじゃないか？」

「そこは、心配無い、ちゃんと、考えてあるわ、でもその前に」

時田は、携帯を取り出し、電話をかけ始めた。

「そろそろ、起きても良い頃だし」

「プルルル、プルルルル、プルルルル、ガチャ！」

「はい、七尾です。」

「さつき、アパートを出る前に、番号を登録しといたの」

「七尾さん、良くきいて、これから——」

俺から、少し離れて、話す時田、どうやら、これからの辻褃合わせの打ち合わせをしているみたいだった。

「——そう言う事だから、上手く、合わせてね。」

「でも！ 時田さん！」

「じゃ、後は、私に任せて」

そう言うつと、時田は、携帯を切った。

「さてと、いい、コイツに着せる、罪状は、殺人未遂、銃刀法違反、それで、捕まれば、虐待の罪も調べられて、少なくとも、そうなれば実刑で、十年以上は、確実な筈。」

話しながら、時田は、ポケットから、ハンカチを取り出し、左肩から少し腕のところに行った所きつく縛り始めた。

「何をするつもりだ」

「アンタ言ったでしょ、このままじゃ、説得力に欠けるって、確かにその通りよ」

時田は、七尾さんの義理のオヤジの元へ歩き、着くと、しゃがみこんだ。

「ふーはーふーはー」

深呼吸をする時田。

「だから、こうするのよ」

「カチャ」

「パアアンー！」

銃声が鳴った、昼間学校で聞いた、玩具とは、を訳が違う、鼓膜を直接揺らされているような、そんな感覚がした。そして、俺が、時田を見ると、時田の二の腕から、出血していた。

「何してるんだお前！」

俺は、すぐ時田の元へ駆け寄った、近づいてみると、気絶したオヤジの右手には、時田が持ってきた『トカレフ』が握られていた。

「お前、自分で銃を握らせて、引き金を引いたのか！？」

「痛つ、へへ、これで、説得力は、バツチリでしょ、アンタ取りあえず、救急車と警察を呼んでちょうだい、これからは、シナリオ通りよ、今、七尾さんも、コッチに向かつてる筈だから」

「分かったよ」

俺は、すぐ携帯で、救急車と、警察を呼んだ。

「まったく、馬鹿だろお前、何でそこまで！」

「はあ、はあ、はあ、バイクで電車に突っ込む奴に言われたくないわね」

「あつ、あれは、条件反射だ」

「アタシには、『目標』があるの、だから、自殺しようとしてる人は、止めるのよ……」

そう言つと、時田、意識を失い、数分経つと救急車が着き、俺も一緒に救急車に乗り病院に向かった。

つづく

第八話 実現されるシナリオ（後書き）

感想アドバイス、お願いします

第九話 登校途中

(ピピピピピピピピピピ―)

「うゝん」

(ガチャ！)

俺は、目覚まし時計を止め、起きた。今は、あのトンデモ無い新学期、初日から二週間程経った朝だ。アパートで独り暮らしをしている俺は、朝の身支度を済ませ、いつも通り徒歩で学校へ向かった。あの後、救急車で運ばれた、俺と時田は、俺は、一泊の入院で済んだが、時田は、あれから学校へは、来ていない。まだ入院しているらしい、俺は、警察から多くの調書を受ける事になったが、上手い具合に、時田のシナリオ通りに進み、七尾さんの義理のオヤジはこのまま行けば、懲役十二年程になる見通しだ、アイツが、タンスに『トカレフ』の弾を置いていき、言い逃れ出来ない状況になっている。まったく、御丁寧なこった。

七尾さんも今は、安心して学校に通っている。俺に何度も礼を言いに来てまいつていたが、七尾さんの笑顔が見れて、ほっとしている俺も何故があった。

全てが『アイツ』の考え通りに事が進んだみたいだが、俺は、『アイツ』の事が気になっていた。

「あの『バカ』は、大丈夫かな」

俺がそう呟くと、俺の背後から、女の声がしてきた。

「あの『バカ』とは、一体誰の事よ？」

俺が振り向くと、そこには、制服を着た、時田可憐の姿が在った。「ちゃんと、生きていたみたいね、夢谷 信哉！ 相変わらず、その変な感覚は、変わらないみたいだけど」

「時田！ お前もう大丈夫なのか？」

「当然よ、まだ少し痛むけど、ちゃんと軽傷になる場所を選んだんだから。」

そう言つと、時田は、腕の包帯を俺に見せた、俺の想像を遥かに超える元気ぶりだったので、俺は、安心した。

「それより、夢谷！ アンタからは、まだ自殺願望に似た感覚が感じられるから、それが無くなるように、アタシが見てあげるから、これから覚悟しなさい。」

「はあ？ ちょっと、どう言つ事だよ」

「いいいから、早く行かないと遅刻するわよ！」

この後、俺の携帯の電話帳の一番上に『時田 可憐』が登録された。

つづく

第十話 中庭（前書き）

早、十話です。よんでいただき、ありがとうございます。

第十話 中庭

時田が、病院を退院して、学校へ来た初日、一時間目、現国、時田は、腕を枕代わりにして寝ていた。二時間目、三時間目も睡眠。四時間目の体育は、退院したばかりで、見学するかと思いきや、怪我した腕をモノともせず、バスケットで活躍をしていた、どうやら運動神経は良いみたいだ。

あんな性格だが、コミニケーション能力は、あるらしく、二週間、居なかったとは思えないほど、たった一日で、クラスに打ち解けていた。

そして、俺が、昼休み、独り机で、コンビニで買ってきた、弁当を出そうとしていると、時田が俺の元にやって来て、話しかけ始めた。

「アンタ、それ持ってちよつと来なさい。」

そう言っ、俺の腕を掴み、教室から連れだした。

「おい、何処に、連れて行くんだよも。」

時田のもう片方の手には、お弁当が掴まれていた。

「いいから、来なさい！」

そして、俺は、学校の中庭にあるベンチへと連れて行かれた。

「ここで、お昼を、食べるわよ！」

そう言っ、時田は、ベンチに腰掛ける。俺も仕方なくベンチに腰掛けた。

「何で、わざわざ、こんなトコでメシを食うんだ？」

俺は、弁当を開けながら、時田に聞いた。

「言っただしょ、アンタからは、まだ自殺願望に似た感覚が感じられるから、それが無くなるように、アタシが見るっで。」

俺は、時田が開けた、弁当を何気なく見ると、可愛い、手作り弁当だった。

確か、コイツ、アパートで独り暮らしだったよな、て、事は、この弁当、コイツが作ったのか？ 性格に似あわず器用だな。

俺と、時田は、飯を食いながら、話を続ける。

「何で、お前は、そこまで、他人に構うんだ？ 俺が死んだって、お前には関係ないだろ。」

「アタシには『目標』が在るからよ、それに、アンタだって、こないだ、七尾さんを助ける為に無茶をしてたじゃない？」

「今、落ち着いて考えると、よく分かんねーんだよ、何で俺が、他人の為にあんな事をしたのか、後、こないだも言っていたが、お前の目標って一体何なんだ？」

俺が、そう聞くと、一瞬、時田の箸が止まる。

「秘密……秘密よ、秘密！」

「なんだよそれ」

「それより、アンタ、休み時間ずっと一人で音楽なんて聞いてたけど、二週間も在って友達の一人も作って無い訳？」

「別に、お前には、関係無いだろ、俺には、友達なんか要らないんだよ。」

「どうして？」

「秘密だ、秘密。」

それから少し経ち、お弁当を食べ終わった、時田が立ち上がり、少し前に歩き、振り向いて、俺を指差しこう言った。

「アンタ、自分が思ってるよりも、きっと良い奴よ！ だから、早

くその変な感じを無くすようにしなさいよ！」
そう言って時田は、校舎へと戻って行った。

つづく

第十話 中庭（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第十一話 朝の迎え

時田が、退院してから、大分経ち、今は、五月の頭だ。俺が朝の身支度を終え、アパートの二階から、階段を降りている時、今日もやかましい声が聞こえて来た。

「大家さん、お早うございます！」

時田がアパートの前を簞で掃いている、一階に住んでいる大家のおばさんに向かってあいさつをしていた。

「あら、可憐ちゃん、おはよう、今日も元気ねえ。」

「ええ、それが取り柄ですから。」

笑顔で話しをしている二人。いつの間にか、何年も住んでいる俺よりも、大家さんと親しくなっていた。

「おはようございます、大家さん。」

階段を降りた、俺は、あいさつをしながら、少し頭を下げた。

「あら、夢谷君、おはよう、夢谷君は、良いわね、こんな可愛い、彼女が毎日、迎えに来てくれて。」

そう、時田は、退院してから、通学途中に在るからと言って、毎日俺のアパートに寄って来ていた。本当に勘弁してほしい。

「ちつ、違いますよ！彼女なんかじゃないですよ！　じゃあ、学校に行きますので。」

足早にアパートを去ろうとする俺。

「じゃあ、大家さん、行ってきます。」

「行つてらっしゃーい。」

これが、ここ最近の俺の朝である。

学校に向かって歩いている途中、俺から時田に向かっては、話しかけは殆どしないが、時田は、俺に向かって、この登校中もそうだ

が、学校でもよく話しかけてくる。

「アンタ、パソコンとか好きなの？」

今日は、こんな話題を振って来た。

「別に好きって訳じゃない、何でそんな事を聞くんだ？」

「だって、こないだ、アパートに上がらして貰った時、部屋にデスクトップと、ノートパソコンが在ったから、普通、独り暮らしじゃ、どっちかあれば、十分じゃないの？」

上がしてもらった？ お前が無理やり上がって来たんだろうが！
たく、それに人の部屋をじろじろ見やがって。

「別に普通だよ、それに二つあつ方が便利なだけだ。」

「ふーん、そうなんだ」

「あと、夢谷つて頭が良いんでしょ、クラスの同じ中学だった子が言つてたわよ学年トップにもなった事あるんでしょ。」

コイツ、何俺の事探つてやがんだ。

「アレは、たまたまだ、いつも、ママが当たっただけだ。」

「お前は、どこの中学出身なんだ。」

なんとなく、俺が時田に聞いてみたら、時田の足が止まり、一瞬、顔が引きつった。

「ん？ 時田？」

「アタシは、隣の県の中学だから、アンタは、知らないわよ、小学校は、コッチだけど中学に入る前に隣の県に引っ越して、今年の三月の頭に、コッチに帰って来たのよ。」

引きつった顔を直し、時田が答えた。

「ほらっ、早くしないと、遅刻するわよ。」

少し俺の前に飛び出し、せかす時田。

「はいはい。」

あの顔を俺は、気になったが、その事には聞かず。俺達は、いつもの学び舎に向かって行った。

う
う
く

第十二話 『子犬の冒険〜走るワンコ〜』

学校に着き、授業開始。 時田の方に目を向けると、いつも通り睡眠学習中だった。本当にアレで大丈夫なのか？

「谷、ゆ……谷、夢谷！」

「！？ どうした、ぼーとして、次、お前ここの問題を解いてみる！」

物理教師が、黒板を指さす。

「はい、分かりました。」

立ち上がり解答を答え始める俺。

「それは、オームの法則で、電流（ I ） $\parallel$ 電圧（ V ） $\div$ 抵抗（ R ） が成り立ち——」俺は、すぐ解答を出し答えた。

「完璧だ、座っていいぞ。」

はあくくならない、こんな問題いくら解いたってなんの役に立つのだから。そして、二、三、四限と終り、いつものように、アイツが俺の机の元にやって来た。

「夢谷！ 行くわよ！」

弁当を見せるながら言う時田。

「はいはい。」

俺は、購買部で買った、パンを持ち、日課になった中庭のベンチへと、向かった。

「「いただきます！」」

手を合わせ食べ始める、俺と時田。俺は、コンビニや、購買でいつも昼は、すますが、コイツは、毎日バリエーション豊かな手作り弁当を持っている。

俺達がお昼を食べている、校舎のほうから、一人の女子生徒が、俺達の所へ歩いて来た。

歩いて来たのは、七尾さんだった。

「こんにちは、二人とも、いつもここで昼食べてるわよね、仲が
良いんだね。」

笑顔で話しかける七尾さん。

「そんな事無いですよ、仲が良い訳じゃないです。」

俺が少し皮肉ぼく、時田を見ながら言った。

「何よ、アンタそんな事言ったら、アタシが無理やり連れてきてい
るみたいじゃない」

（その通りだろ！）

心の中でツツコム俺。

「ふふふ。」

口に手をやり少し笑う七尾さん。

「七尾さんも、元気そうで安心したわ。」

その顔見た、時田がにつこりと笑いながら言った。

「はい、お二人のおかげです、それで今日は、ちょっとお礼と言っ
か……」

七尾さんは、ポケットからあるモノを取り出し、俺達に見せた。

「どうかしら、今日、友達にいただいたんだけど、私は、明日用事
があるから、よかったら二人で。」

七尾さんは、二枚の紙を俺達に見せた。

『子犬の冒険〜走るワンコ〜』

「……え〜と、七尾さんこれは一体？」

「これは、今、絶賛放映中の映画の、『子犬の冒険〜走るワンコ〜』
のチケットよ、明日の土曜日までしか使えないんだけど、私は、用
事があるし、よかったら、どうかなあと思って。」

「いやいや、こんな時田も興味は、無いだろ。」

（ガシ！）

チケットを持っている、七尾さんの手を握る、時田。その目は、

とても輝いている。

(まっ眩しい……)

「アタシこれ、ちょく観たかったんですよ!」

「そうなの、良かった……」

胸に手をやりほっとする、七尾さん。

「このチケットくれた友達も、友達に貰ったんだけど行けなくて、このままだったら、せつかくのチケットが無駄になる所だったの。」

きつと、その友達の友達も、友達に貰い、巡り巡って、俺達に來たんだろうな。

「じゃあ、楽しんで来てね。」

そう言つと、七尾さんは、手を振って校舎へ戻って行つた。

つづく

第十三話 願い事の約束

校舎へ戻って行く、七尾さんに手を振る時田。

「ふうー明日行くわよ！」

「断る。」

「何だよ！ 良いじゃない、せっかく貰ったのに。」

ベンチに座る俺の前で、受け取った、チケットを見せる時田。

「俺は、そんなの興味が無いんだよ、誰か他の奴を連れていけば良いだろ、例えばクラスの奴とか。」

「これは、アタシと、アンタが貰ったモノなのそれを興味が無いからって、他人に上げるなんて、七尾さんに失礼よ。」

「それに、この話しは、可愛い、子犬が、一生懸命生きる内容の映画と聞くと、アンタもこれ見て何か目標を持って、その奇妙な感じを無くしなさいよ！」

「でもな〜」

俺は、顔をそむけ、人差し指で頬を掻きながら、空を見る。

「もう、ハッキリしないわね、じゃあ、こうしましょう、明日の土曜日、一緒について来てくれたら、アンタの願いを一つ聞いてあげるわ、可能な限りね。」

「！？ ホントか？」

俺は、もう一度確認のため時田に聞きなおした。

「ええ、いいわよ、七尾さん時も、アタシが一人で解決する筈が、アンタを巻きこんで怪我までさせて、手伝って貰ったのに、何もお礼をしてなかったからね。」

俺は、コイツに頼みたい事がずっと在った。だが、それを言いそびれ、今日まで来てしまった。毎日後悔していた、だが、言えなかった。だから俺は、これが良い機会だと思い、時田の考えに乗った。「分かった、行くよ。」

「ホント！」

「ああ、その代り、約束は、守れよな。」

「モチロン！」

そんな話を話していると、いつの間にか、昼休みの終りのチャイムが中庭にも、響きわたった。

（キーン、コーン、カーン、コーン―――）

「あつ、ヤバ、次、体育じゃん、急ぎましょ！」

そう言つと、時田は、校舎に向かって走り出すが、ベンチから立ち上がり動かない、俺に気づき、足を止めた。

「どうしたの？ 急がないと、遅れるわよ。」

「ああ、先に行つてくれ、どうせ、俺は、今日ジャージを忘れたから、このままグラウンドに行くわ。」

「そう、残念ね、体育が出来ないなんて。」

「お前と一緒にすんなよ、俺にとってはラッキーだ。」

「あつそう、じゃあ、アタシは、教室に行くからね」

そう言つと、時田は、校舎へと、消えて行った。

「さて、俺は、下駄箱へ行くか。」

そして、俺は、少し歩き、さっきまで二人で座っていたベンチを

見た。

つづく

第十四話 映画館（前書き）

短いですが、どうぞ

第十四話 映画館

そして、土曜日の朝、俺は、町の映画館前に、10時に集合となっていたので、その10分前には、着くように、アパートを出て、映画館へ向かった。

休日と言う事もあって、映画館前には、人は、沢山居た。その中に、時田の姿も俺は見つけた。認めたくは、無いが、私服に身を包んだ時田は、予想以上に可愛かった。

「よう。」

時田に近づき話しかける俺。

「あら、早いわね、まだ10分以上も余裕が在るわよ。」

「俺は、待ち合わせには、遅れないんだよ。」

「ふん、じゃあ行きましょう！」

そして俺達は、映画館へと入って行った。

映画が始まると、食い入るように、観ている時田、俺はなんとなく、観ていたがまあ面白い。

映画がラストに入ると、隣から、すすり声が聞こえて来た。

「わおーん！」

「良かった、良かった……」

俺の隣で鼻を押さえている時田の姿が……いやいや、お前、そんな涙脆いキャラじゃ無いだろ。

そして映画が終わり、出口へ向かう俺と時田。

「ずずつ、まあまあ、だったわね。」

まだハンカチで押さえている時田。

（うそつけ！）

映画館の外へ出ると、時田は、こう切り出した。

「ちょうど、12時過ぎだし、これから、どこかでお昼でも――」

時田の言葉が止まり、時田が左を横切った、女の子を目で追う。

「時田？　もしかして……」

「ええ、あの女の子、自殺願望がある。」

「追うわよ！」

「ああ、分かった。」

俺は、『今日一日』は、時田に付き合うと決めていたので、時田と一緒に、その女の子の後を追う事にした。

つづく

第十五話 眼鏡女子

俺達は、その女の子の後を追う事にした、髪が長く、メガネをかけ、背は平均よりも少し高めの時田よりも高く、見た目的に、俺達より、少し、年上のように思えた。

「おい、時田、本当にあの子が、自殺しようとしているのか？」

「ええ、今すぐって、訳じゃ無いみたいだけど、かなり強い、自殺願望が感じられるわ」

俺達は、その女の子に、気付かれないように、後を着けて行くとその女の子は、近くのドラックストアへと入って行った。俺達もそれに続き、ドラックストアへ入って行く。

「何を買うつもりだ？」

俺達が、覗いていると、女の人はある商品に手をかけた。そしてそれを見た、時田が女の子の元へ歩いていき、商品を持った手を時田が掴む。

「おっ、おい！」

「アンタ、これで、手首でも切って自殺するつもり？」

そう、女の人が手に取った商品は、カミソリだった。女の子は、驚いた顔で時田の顔を見ている。

「どうして、それを……」

「やっぱり、そうなのね、アタシは、他人の自殺願望が分かるの、何が在ったか、話してくれないかしら、アタシは、アンタを助けたいの。」

その言葉を聞いた、女の子は、時田に抱きつき、涙を流した。
「ふえええ〜ん。」

俺達は、店に、迷惑をかける訳にはいかないので、近くの公園へ

と移動した。

公園のベンチに座って貰ったこの女の子の名前は、橘 涼香（
たちばな すずか） この町の女子高に通う、高校三年生だと聞いた。

俺達は、橘さんに、何故自殺をしようと思いつめたか、教えて貰った。

それは、先週の日曜日の夜、七時過ぎ、橘さんは、友達と遊んだ帰り、電車に乗って、自宅があるこの町の駅まで来て、駅のトイレに用を足しに行ったらしい、そして、用がすみ出て来ると、二十代前半位の男三人に囲まれ、今のトイレの中でのお前は、盗撮した、言う通りしなければ、動画をネットにばら撒くと脅されたらしい。

そして、抵抗出来ず、駅の近くに止まって在った、黒いワゴン車に乗せられ、目隠しや、猿ぐつわ、手足を縛られ、何処かの部屋へ連れられ犯されてしまったのだ。その橘さんは、解放されたが、身元も、ばれてしまい、もし、警察へ通報したら、全部ネットへ流すと脅されて、誰にも相談できず、そして……自殺に思いついたと言う。

「許せないわね。」

「私、どうしたらいいか、もう分からなくて。」

「大丈夫！ 安心して、アタシが、その男達を捕まえてやるから。」

「えっ、でも、どうやって？ 犯人の居場所も分からないのに？」

「そうだぞ、もし犯人居場所が分かってても、そのデータを何とかしなくちゃ、下手に警察を呼んだら、犯人達が怒って、配信してしまうかも、しれないだろ。」

「それは、そうだけど、橘さん、思い出すのは辛いかもしれないけど、何か他に、犯人の手がかり、になるような事って無い？」

少し、黙りこみ、橘さんが答えた。

「車に乗って居たのは、大体、二十分位だと思うけど……あと、車から降りる1分位前に、5秒位いきなり、ガタガタって揺れたのを覚えてるわ、後、車に乗って居る時にこんな事を言っていたわ。」

「いやあー、今日の駅は、当たりだったな、こんな可愛い娘に当たるなんて。」

「ああ、まったくだな、日曜の夜は、最高だな。」

「後、カメラには、何が写っているんだ、今日も朝から仕掛けてたんだろ。」

男達は、こんな事を言っていたと、橘さんは、俺達に説明してくれた。

「成程、じゃあ犯人は、いつも、日曜日の朝の内に何処かの駅にカメラを仕掛けて、そして夜に誰かを見つけては、こんな事を繰り返しているのね。」

そして少し考え、時田が橘さんに言った。

「任せて、橘さん、アタシが月曜日までに、犯人を逮捕して見せるわ。」

「『アタシがアナタの自殺を止めます！』」

つづく

第十六話 ハッキング(前書き)

読んで下さり、ありがとうございます。

第十六話 ハッキング

それから、橘さんと話しをした後、時田は、連絡先を交換して、橘さんは、公園を後にした。

「いいのか、あのまま、返しちまって。」

「大丈夫よ、アタシ達に相談したら、大分自殺願望も小さくなって
いたし、後は、その男三人組みを捕まえれば、良い訳ね。」

そう言つと、時田は、公園の出口に向かって、歩きだす。

「どうやって、捕まえる気だ、何かまた、作戦でも、あるのか？」

「ええ、恐らくまた奴らが動き出すのが、明日の日曜からだから、
今日は、準備があるから、アタシは、もう帰るわね。」

「おい！」

俺は、時田を呼び止める。

「お前、一人で何とか、するつもりなのか？」

時田は、振り向き、俺に答えた。

「ええ、そうよ。誰の助けも要らない、アタシ独りで解決して見せ
る、こないだは、ホント悪かったわね、巻き込んだじゃって、アンタ
が良い奴だったから、アタシも甘えちゃったわ……じゃあ、またね。」

時田は、公園から去り、俺もアパートへ戻った。

時刻は、18時過ぎ、アパートで俺は、ベットに仰向けになり、
またアイツの事を考えていた、付き合いは、短い分かる、アイツ
の事だ、トンデモ無い無茶な作戦が在るんだろうな、なんせ自分の

腕を銃で撃つ奴だ。

ああ、また、言いそびれた、駄目だな俺は……『この事は』、時
が経てば経つほど、俺の心に深く突き刺さって行く。

「自殺を止める少女か……」

「ああああクソ！ 『これで、本当に最期だ！』」

俺は、アパートを飛び出し、自転車に乗り、町の電気店へと向かい、色々な電気部品を買い、次にホームセンターで作業服と、帽子を買って、アパートへ戻って来た。

相手は、男3人だ、俺一人で敵う訳が無い、だったら……俺は、買ってきた、電気部品などである『モノ』を作った。

「まず、この町の駅から、車で約20分程の所に犯人の居場所が在るんだよな、時速40キロで走ったとして、13キロ程か、せめて方向が分かれば、仕方ない、この手で行くか。」

もう時間は、午前零時を回っていた。

「さて、ここからが、勝負どころだ。」

俺は、パソコンに向かい、インターネットを開き始める。まず、警察の、Nシステムにハッキングだ。

Nシステムとは、自動車ナンバー自動読み取り装置のことで、警察が犯罪捜査に使用するものだ。

「確か駅前周辺の国道には、大体、設置されていた筈だ。もし、これで、先週の日曜日午後7時頃に通った黒いワゴンが見つかれば、犯人達が向かった、大体の方向が分かる！」

そして、俺は、ハッキングを開始した。

（カタカタカタカタ、カタカタ！カタカタ！カタカタ！ カタカタ）
「クソ、流石に、セキュリティが半端無いな、でも、舐めるなよ。」

俺は、夜が明け始めるころに、やっと、Nシステムのプログラム内へ侵入する事が出来た。

「ふう〜次は、県、そして、市の、管理システムに侵入しないと。」

（カタカタカタカタ！ カタカタカタ！ カタカタカタ！）

そして、俺は、日曜の12時過ぎ、ようやくNシステム内へ、完璧に侵入する事が出来た。

俺がこんなにも、パソコンが得意なものには理由がある、それは、もともと、パソコンのプログラマーだった、死んだ、父さんの影響で、友達が居ない俺にとっては、絶好の暇つぶしの道具だったからだ。

「よし！ 次は、写真を見て、探すだけだ、日曜の7時……黒のワゴン……黒のワゴン……これだ！」

先週の日曜、7時10分頃、駅から南の国道を走る、黒いワゴンを俺は見つけた。

つづく

第十七話 場所特定

俺は、Nシステムへハッキングし、駅から南の国道を七時頃走っていた、黒いワゴン車を見つけると、今度その方角の大体の距離を計算の始めた、時速40キロで走ったとして、20分で、約13キロ、これだけじゃ、まだ、犯人の居場所は、分らないが、俺は、七尾さんが車から、降りる1分位前に、5秒位いきなり、ガタガタって揺れたのを覚えていると言っていたのをちゃんと覚えていた。「これは、恐らく、道路の舗装工事をしている途中だったんだろう、という事は、犯人の居場所は、駅から、南へ約13キロで、先週の日曜、それくらいの地域で道路舗装をしていた、場所に絞られる！」

俺は、すぐネットへアクセスし、先週の道路の工事情報を調べた。「該当する場所が、二つや三つは、あると思ったら、一つしかない、これは、付いている！」

俺は、すぐ、ネットから、地図をプリントし、電気屋で買ってきた部品で作った『あるモノ』と、ホームセンターで買ってきた、作業服と、帽子とノートパソコンをリュックに詰め、割り出したポイントへと、自転車を走らせた。

そのポイントへ俺が着いた、時は、すでに、午後5時半を回っていて、辺りは、薄暗くなり始めていた。

「この辺りだよな。」

確かに、そこは、最近舗装したばかりの形跡があり、その道路の周りには、一戸建ての家が、何件か並んでいる。

「余り、人通りの多そうな道路じゃ無いな。」

自転車を押しながら、近くの家を調べたが、黒いワゴン車は、見つからなかった。

「クソ！ もう、何処かへ出かけているのか!？」

俺は、その辺りを回り、黒いワゴン車が現れるのを待つことにした。それから、1時間半程経ち、辺りはもう真っ暗になったころ、俺の目の前を黒いワゴン車が通り過ぎた、すぐ近くの家の駐車場へと入って行った。

「!？」

「アレだ！」

俺は、自転車をその場に置き、電柱に身を隠した。すると一人の男が車の助手席から出て来た。

辺りをキョロキョロ見渡す男。

「おい、今のうちだ、誰も居ない、早く運べ！」

男がそう言くと、車の中から、男二人が出てきて、手足を縛り、猿ぐつわをされ、目隠しをされた女の子を家の中に運び始めた。

「うううーんんん！」

俺は、電柱ごしから見ていて、その女の子が、誰だかすぐに分かった、体型、髪型、

「時田!!！」

そして、時田は、男達に家の中に連れて行かれた。

つづく

第十八話 武器（前書き）

感想、アドバイス、お願いします。

第十八話 武器

「時田！！」

「何してんだ！ アイツは！」

時田は、男達に抱えられ、家の中に連れて行かれてしまった。

「クソ！ 急がないとな。」

俺は、男達が家の中に全員入ると、庭に侵入し、電話回線に、持つてきた、ノートパソコンを繋げた。

「後は、この家のパソコンにウイルスをインストールさせて、使えなくさせると。」

（カタカタカタカタカタ！カタカタカタカタ！）

「Enter！」

俺は、インストールを終えると今度は、持つてきた、作業着と、帽子をかぶり、玄関へ行きインターホンを鳴らした。少しと経つと、男の声が玄関のドアの向こうから聞こえて来た。

「何の用だ？」

「はい、〇〇電力会社の者なんですが、この周辺の電圧が一時的に上がってしまったて、その調整をする為にブレーカーを見せて貰いたいのです。」

俺は、こうウソをついた。

「いや、俺の所は、いい。」

「ですが、このままにして置くと、こちらのお宅が停電してしまう恐れがありますので、ほんの、五分程の点検で終わりますので。」

「……」

男は、少し黙り考えているようだ。

「ちよつと待つてろ。」

男の足を音が、玄関から、離れて行く、どうやら仲間に連絡に行つたみたいだ。

そして、男がもう一度玄関に帰つて来て、玄関を開ける。

「たくつ、これからつて時に、早く終わらせる——」

俺は、男がドアを開けた瞬間、ハンカチで、口を塞ぎ、電気屋で買つてきた部品で作つた、『スタンガン』を男に押し当てた。

「ぐがっ！」

男の声が少し漏れたが、ハンカチで押さえて居たので、他の二人には、聞こえなかった。俺はその男を庭の端へと引きづり連れて行つた。

「おい！ そんなに電圧は、上げて無いからら、氣絶してないだろ、他の男と二人と、女の子はどこに居る？」

俺は、スタンガンを男の顎に近づけ、男に聞く。

「ひっ！」

男は、まだ体が痺れて動けない。

「これは、電圧を調整出来るから、人一人くらい、簡単に殺せるぞ！」

「分かつた、言う、他の二人と、あの娘は、玄関を入つて一番奥の右の部屋に居る！」

「何か、凶器は、持っているのか？」

「ひっ、一人は、ナイフを持っている」

「嘘じゃ無いだろうな。」

「ああ！　嘘じゃ無い。」

「そうか……じゃあ、寝てろ。」

「えっ？」

（パッチ！）

「うっ」

俺は、電圧を上げスタンガンを押し当て、男を気絶させた。

「よし、行くか！」

つづく

第十九話 武者震い

俺は、玄関からそつと、入り、さつき男に聞き出した、一番奥の右の部屋へ音を立てないようにして向かって行つた。

おれは、襖を開け、そつと、中の様子をうかがつた。

「おい、早く、やっちまおうぜ。」

「もう少し、待つてろ、その電力会社の奴帰るまで。」

「ううーん！ううー！」

時田は、目隠しは取られていたが、両手両足を縛られ、猿ぐつわをされて、床に転がつていた。俺は、警察を呼べば、それに気付く時田を人質に取られる可能性があるので、警察には、まだ連絡は、していなかった。

さて、どうするか、一気に攻めこんでも、相手は、二人だ、スタングンを持っているとはいえ一人は、ナイフを持っているらしいから、分が悪いな。

まず、どうにかして、あの二人の注意をそらして、その隙に時田の奴を助け出さないと。

そして、俺は、先ほど、玄関に積まれてあつた、雑誌の束を思い出した。恐らく、ごみを出すためにまとめて合つた、モノだろう、そして、俺は、それを利用する事を考えた。

俺は、玄関にあつた、雑誌の束にスタガンの電流で火を付け、そして、すぐ、玄関近くの部屋へと隠れた。

そして、燃えている、雑誌の匂いと、煙に気付いた、男二人が、慌てて、玄関に走つて来た。

「おい！ 何か燃えてんぞ！？ 水だ！ 水！！！」

「ああ、分かってるよ！」

そして、俺は、男達が玄関の火に気を取られている内に、時田の居る部屋へと急いだ。

「うめふぁに！（夢谷！）」

「し！ 静かにしろ。」

俺は、時田の猿ぐつわと、手足のロープを外した。

「ぶはぁ！ 夢谷！ どうしてここに居るのよ！？」

「それは、俺のセリフだ！ 何してんだ！ お前は、まあ良い説明は、後だ、早く窓から、逃げるぞ。」

「分かったわ。」

そして、時田が、窓から、家の外に出た所で、男二人が、部屋に戻って来てしまった。

「おい！ テメー、一体何してやがんだ！」

「ちっ！ 時田、お前は、早く逃げて、警察に連絡しろ！」

「おい！ ちょっと待てよ、お前らいいのか警察なんか連絡して？」

眼鏡をかけている男が、部屋に在った、パソコンを触り、俺達に話しかける。

「どう言う意味よ！」

「このパソコンには、今まで、俺達がやってきた、女の子の動画や画像が沢山ある、そして、俺は、それをすぐにネットにアップ出来るんだぜ、そうなったら、何人の女の子の人生が滅茶苦茶になると思う？」

男は、不気味に笑いながら、俺と時田に言った。

「くっ 卑怯よ、アンタら！」

「時田！ 気にするな、早く警察に連絡しろ。」

「でも、どうすんのよ、ネットに流れたら、それにアンタは……」
俺は、振り向き、窓の向こうの、時田にこう言った。

「心配すんなよ、俺に任せろ、早く行け。」

「……分かったわ、すぐ呼んでくるわ。」
そして、時田は、外へと走って行った。

「やっぱり、自分の安全の為に、他人は、関係無いって事か？」

「バカだろお前ら、俺が、お前らがやりそうな事を、考えもしないで、ここまで来たと思っているのか？」

「はあ？ どう言う意味だ！？」

「この家には、パソコンが二台あるみたいだが、さっき、電話回線から、ハッキングして、ウイルスを入れて、使えない様にして置いた。」

「はあ！？ そんなバカな。」

（カタカタカタカタカタカタ！）

男は、キーボードを叩くが、パソコンは、反応しない。

「クソ！ 全く反応しねえ！」

「おい！ どうすんだよ、これから。」

もう一人の体の大きな男が、キーボードを叩いている、眼鏡をかけている男に聞く。

「これから、どうなる？ 決まっているだろ、強要罪、略取・誘拐罪、逮捕監禁罪、集団強姦罪で、お前ら3人は、刑務所行きだ。」

「チィ！ クソ！ 全部、お前のせいだ。」

「ああ、こうなりや、警察が来る前に、お前をぶつ殺しいやる。」
「言うつと、眼鏡をかけている男が俺にナイフを向ける。」

「殺人罪もそこに、加えるつもりか？」

「お前、さつきから、随分余裕そうな顔しているが、嘘だろ、足が震えてるぜ。」

確かに、俺の足は、震えている、そりやそうだ、スタガンを持っているとはいえ、2対1でナイフまで、向けられてんだぜ、本当は、こっちは、心臓バクバクで汗だくなんだ、隙を見せない様に、平気な顔をするのが、やつとなんだよ。

「これは武者ぶるいだよ、ちゃんとコツチには、勝算があるからな。」

（バチバチ！ バチバチ！）

俺は、スタガンを相手に向けた。

つづく

第二十話 顔に滴る何か

「これは武者ぶるいだよ、ちゃんとコツチには、勝算があるからな。」

「バチバチ！ バチバチ！」

と言い、スタガンを相手に向けた、俺だったが、勝算なんてモノは、無かった。

俺と男達は、少しの間睨みあい、先に仕掛けて来たのは、相手の方だった。

「死ね、このクソガキ！」

体の大きい男が、部屋に在った、椅子を俺に、振り下ろしてきた！（ビュ！）

俺は、その場にしゃがみこみ、椅子を避け、椅子は、俺の髪をかすって行った。

（危ねえ！ あんなの食らったら、ひとたまりもないぞ！）

俺は、椅子を避け、すぐ男の間合いを詰め、スタガンを押し当てた。

（バチバチバチ！）

「ぐあああー！！！」

（パタン！）

その場に倒れ込む男。

（よし、後、一人だ！）

俺が、もう一人の眼鏡をかけた男の方を、振り向こうとした時、眼鏡をかけた男は、俺の右手を蹴飛ばし、俺はスタガンを手放してしまった。

（ドカ！）

「痛っ！」

（カラカラカラカラ）

スタガンは、床に落ち転がる。

「死ねー！」

そして、男は、俺の脇腹にナイフを突き刺した。

（グサ！）

「あっ！？　ぎゃゃゃー！！！」

俺の脇腹に刺さったナイフから、血が滴り、床に落ちる。

（ポタ、ポタ、ポタ、ポタ）

「へへ、はははは！」

男は、狂ったように笑い、俺の脇腹から、ナイフを抜いた。

（ずぼっ！）

「ガハッ！」

（ボタン！）

俺は、その場に倒れこんだ。

「はははは、警察は、まだ来ないみたいだな、さて、痛いだろう？
でも安心しろ、止め刺してやる。」

そう言うと、男は、ナイフを持ちかえ、しゃがみ込み、俺の頭上に構えた。

（ヤバイ、やばい、やバイ、ヤバイ、やばい、死ぬ、死ぬ、死ぬ。）

体は、動かない、床は、血で赤く染まって、徐々に意識が遠のいていく。

「よくも、俺達の楽しみを滅茶苦茶にしてくれたな……死ねー！！！」

「させるかー！！！」

（バチバチバチバチ！！）

男が、ナイフを振り下ろそうとした時、部屋に戻って来た、時田が、俺の落とした、スタンガン拾って、男に突きつけた。

「くぎゃゃゃー！！！」

男は、感電して気絶し、俺は、間一髪のところ助かった。

「アンタ大丈夫！　もうすぐ警察と救急車が来るわ！」

俺の傷口を押さえ、話しかける時田。

「痛っ！ 何で、お前戻って来ただよ？ 逃げろって言つたろ。」

「アンタが心配に、決まってるからじゃ無い！」

霞む、意識の中、俺の顔に、何かが、垂れて来た。

（だから、嫌なんだよ…… もう『つくらない』って、決めたのに。）

ここで、俺の意識は、途絶えた。

つづく

第二十一話 病室

「うん」

俺は、目覚ますと、知らない、ベッドに横たわっていた。ひして、その隣には、椅子に座っている時田の姿が在った。

「あつ！ 夢谷、目が覚めた？」

安心した顔で、俺に話しかける時田だったが、その顔は、疲れているようにも見えた。俺は、体を起こした、まだ傷口は、痛む。

「痛つ、ここは、どこだ？ 今は、何日だ？」

「ここは、〇〇病院の個室の部屋よ、それで今日は、月曜の夕方よ、アンタ、まる一日位、寝てたんだから。」

「そうか。」

俺は、窓の外を少し眺めた、暮れかかっていた赤い空を見ながら、俺は、頭の中を整理し、時田に気になっている事質問をした。

まず、時田が、何故あの男達に捕まって居たかと聞くと、あの日曜日、時田は、朝から、この地域の駅のトイレを、回って、盗撮のカメラが、あるかを探したらしい。そして、こないだ、橘さんが盗撮され、男達に捕まった、隣の駅で、カメラを見つけ、夜になるまで待ち。自分が囷になろうと考えたのだ。

「お前、男達に連れ去られた後、どうするつもりだったんだよ？」

「ああ、それは、コレをあいつ等の家に置いて来るつもりだったから。」

時田は、ポケットから、小さな黒い機械のようなモノを取り出し俺に見せた。

「これは……発信器か？」

「そつ、これを仕掛けて置いて、後から、アタシを解放してから、あの家を特定するつもりだったの、そこへアンタが来たのよ。」

「じゃあ、お前は、犯されるの覚悟で、あいつ等に捕まったのか！？」

時田は、俺に背を向け答えた。

「そうよ。」

そして、病室のドアへと歩いて行く。

「そろそろ、面会時間も終わりだから、アタシ行くわね。」

「ちょっと待てよ！ 時田！」

時田は、足を止めたが、俺には、背を向けたままだった。

「どうして、お前は、そこまで自分を犠牲にしてまで、他人を助けるようにするんだ？」

「言っただよね、アタシには、目標があるって、その為には、アタシは、どうなったて良いのよ、明日、学校が終わったらまた来るわね。」

「あと、ありがとう……」

「ガタン！」

そして、時田は、病室から出て行った。

つづく

第二十二話 俺の願い

次の日の火曜日、午前中に、俺の病室には、話を聞きたいと言う、警察の人が来て、午後は、橘さんが花を持って、俺を見舞に来てくれた。何度もお礼を言われ、俺は、まいつていたが、時田にも、お礼を言つといてくれと言った。もしかしたら、あいつが、橘さんを見つければ、大変な事になっていたかもしれない。

それから、橘さんが、帰った後、俺は、病室を抜けだし、屋上へと向かった。まだ傷口は、痛むが歩けない程では、無かった。

屋上は、誰も居なく、ガーデニングやベンチなども置かれていた。俺が屋上へ来た理由は、学校がもうすぐ終わり、時田が病院に来るからだ。俺は、時田に言わないといけない事が在るのに、それを避けようとして、会わない様に、屋上へ逃げて来た自分が腹立たしかった。

「何してんだ、俺は、ちゃんとアイツに言わなきゃいけないんだろ？ 決めただろ俺には——」

（ガタツ）

ドアが開いた音に気付き、振り向くと、そこには、時田の姿が在った。

「どうして、俺がここに居ると分かったんだ？」

「なんとなくね、それより怪我人がなに出歩いているてんのよ！ さつさと、病室に戻るわよ。」

そう言つと、時田は、俺の元に歩いて来て、俺の腕を掴もうとしたが、俺は、その手を振り払った。

「!？」

「……触るな。」

「どうしたのよ!？」

「お前、言ったよな、こないだの土曜日映画に付き合ったら、何か、俺の願いを聞いてやるって。」

「ええ、言ったけど。」

俺は、屋上のドアへとゆっくり、歩いて行く。

「もう——」

(言うんだ、言わなきゃ、またあんな思いをする事になる……)
「もう、俺に、構わないでくれ。」

「ちょっと、それどういう意味よ!？」

時田が駆け寄って来て、俺の肩に掴もつしたが、俺は、手、その手を払った。

「!？」

「目ざわりなんだよ、お前は……」

時田、驚いた顔でその場に立ち尽くしていた、そして俺は、時田を置いて

屋上を後にした。

つづく

第二十三話 黒猫、子猫

そして、俺は、金曜日に病院を退院する事が出来、月曜日には、学校へ行く事へした。当たり前だが、あの屋上で時田にあんな事を言ってから、時田は、病院には、来なかった。

俺は、朝の身支度を終え、アパートの階段を降りて行くと、今日も、大家さんが、アパートの前を掃除して居た。

「おはようございます。」

「あら、夢谷君、もう体は、良いの？」

「ええ、おかげ様で、まだ多少痛みますが、大丈夫です。」

「今日は、可憐ちゃんは、まだ来てないけど、珍しいわね。」

「もう、来る事は、無いですよ。」

俺は、大家さんにそう言っ学校に向かった。

学校でも、時田は、俺には、話しかけたりはしなかった、その変な空気に気づき、女子が、時田の所に集まっていた。聞きたくはなかったが、机で寝た振りをしている、俺の耳に話声が聞こえて来た。

「可憐ちゃん、夢谷君と何かあったの？」

「えっ！？ 別に何も無いわよ。」

「でも、変だよ、いつもは、夢谷君と、あんなに仲良が良いのに、今日は、一回も話してないじゃない。」

「ホントに、なんでも無いって、あっ！ アタシ先生に頼まれごと

されてるんだった。」

（がらっ！）

そう言つと、時田は、教室から出て行つた。

昼休みも、俺は、独りで昼食を食べ、今日一日、誰とも話す事無く、学校を後にした。

そう、これが『普通』の俺なのだ、中学は、ずっとこんな生活をしていた。これが俺の求めた、答えだった。

そんな、生活が二週間程続いた、五月下旬、俺は、雨が降る中、傘を差しながら学校から、帰る途中、道路の端に朝には、無かった段ボールが、置かれて居る事に気がついた。

（ザーザー――）

「何だ、コレ？　俺が段ボールを覗き込むと、そこには、雨に濡れて震えている一匹の真っ黒な子猫が居た。

「にゃー、にゃー。」

（ザーザーザー）

雨の音が子猫の小さな鳴き声さえもかき消すように、鳴り響く。自分でも、良く分からないが俺は、自分の持っていた傘段ボールに被せ、その場を後にした。

「何してんだろうな、俺は。」

ずぶ濡れになりながら俺は、そう呟きアパートに向かって歩いて行くと、後ろから、走ってくる足音に気付き振り向くと、そこには、俺の傘と、さっきの猫を抱きかかえて、息を切らす、時田の姿あった。

「はあ、はあ、はあはあ、はあ、はあ。」

「とつ、時田……」

「アンタは、良い奴よ、やっぱり放っておけない！　何でそこまで、

他人と距離を作るの!？」

「何だよ、俺には、もう構うなって——」

「黙って聞いて!!」

俺の言葉を遮って、時田が叫ぶ。

「アタシ、言ったわよね、アンタには、自殺願望に似た感覚が感じられるって、その感じはね徐々に消えてたのよ、それなのに、ここ二週間でアンタのその感覚は、初めて逢った以上に大きくなってるの! 自分では、分かっているんでしょ何が原因か!？」

(ザーザーザー)

俺は、時田に、今まで、誰にも言ってこなかった『ルール』を明かした。

「俺は……五歳の時に病気で母さんを亡くした、そして、小四の時に父さんを事故で亡くし、小六の時には、親友を事故で亡くしたんだ……そして、俺は気づいたんだ、大切な人が居ると、またその人を失った時俺は、辛い思いをする、だったら最初から、もう大切な人は、要らない、友達も要らない、目標も無いし、世界に期待したりしない、俺は、独りで生きて行くってそう決めたんだ、それなのにお前が、俺の前に現れて、俺の中に入って来て、俺を惑わすんだ! だから……俺には、もう構わないでくれよ、俺は、独りが良いんだ!」

「嘘よ。アンタが独りを望んでいる筈は無いわ、独りを望んで、アンタが幸せなら、アタシは、すぐにもアンタの前から消えてあげる。」

左手に持った傘を投げ捨て、俺に近づいて来る時田。そして俺の目の前に来ると、右手で猫を持ち、残った左手を使って、俺の胸ぐらを掴んだ。

「失うのが怖い? いつか、消えて無くなるから、大切に思えるの

よ、誰だっ ていつか死ぬわ……でも、その時まで、アンタが楽しく
生きれるなら、それで良いじゃない。」

手を話し、俺の胸に、頭を置く時田。

「アンタは、ホント良い奴よ、アタシが保障するわ、例え、アタシ
がしー消えたって、独りにならない様にさ、もっと友達作ろうよ。」

「お前が、最初の友達になつてくれるか？」

「ええ、モチロン。」

「にゃー、にゃー、にゃー。」

その日の雨は、やけにしょっぱかった。

つづく

第二十四話 友達づくり

俺は、ベッドで寝ていると、何やら顔に生温かいモノが当たっている事に気づき目を開けた。

「うゝん、なんだ？」

そこには、俺の、頬を舐めている、一匹の黒猫が居た。

「わっ!？」

「あつ 『ムー』か。」

そう、コイツの名前は、『ムー』昨日、道に捨てられていた、♂の黒い子猫だ。

あの後、俺のアパートに来た、時田は、仲の良くなった大家さんと、交渉し、特別に俺の部屋でムーを飼って良い事にしてもらった。そして、俺が、ムーに猫用のミルクをやっていると、アパートの階段を駆け上がる足音が聞こえて来た。

(ダッダッダッ! ダッダッダッ!)

「ムーおはよう!！」

俺のアパートの玄関のドアを開け囲気よい良く、俺の部屋に上がり込み、ムーを抱く時田。まあ、ムーの名付け親でもある。ちなみに、夢谷の夢の字からとってムーになった。

「おはよう、ムー! 元気にしてた? あ、ついでに、夢谷おはよ!！」

笑顔で俺に言う時田。

「おはよじゃねえよ、ノック位して入ってこいよ。」

「いいから、いいから。」

その後、時田が、ムーと構っている間に俺は、朝の支度を済ませた。

「じゃあ、学校へ行ってくるから、おとなしくしているんだぞ。」

「にゃー」

俺は、ムーの頭を撫でて、部屋を後にし、アパートの階段を降りて行く途中、時田が携帯を忘れたと言って、俺の部屋に戻った。

俺と時田は、今、学校へ向かいながら、話している。

「いい、夢谷！ アンタ、今日からは、ちゃんとクラスの人とも仲良くなつて、友達になんのよ！」

「でもなあゝ今まで、随分友達を作つてなかったから、上手く行く自信が無いな。」

「心配しなくても、大丈夫よ、アタシにちゃんと、考えがあるから。」

「へーそうか、そいつは、頼もしいなあゝ（棒読み）」

（コイツの考えは、いつも凄いからな、ホントに大丈夫か？）

そして学校に着き、俺は、初めて、教室に入りながら、あいさつをしよう思っていた。

「みんな、おはよー！！」

時田のあいさつが終わった後おれも…

「おつ、おはよ……」

教室に居た、クラスメイトの視線が俺に集中する。そりゃそうだ、今まで、クラスになじんでいなかった奴が、いきなり挨拶をしたら、不思議に思うに決まっていた。

（やつぱり、そんな急に友達なんて、できないかな……）

俺は、その後、トイレに行き戻ってくると、机の上に置いてあった、リュックが少し動いたことに気付いた。

「？」

俺は、リュックを開けると、そこには、アパートに置いて来た筈の『ムー』が居た。
「にゃー。」

「ムー！ 何でこんな所に…… あっ、ときたー！」
近くに居た、クラスメイトが、ムーの鳴き声を聞いて、俺の机に集まって来た。

「あっ、夢谷君、その猫どうしたの？ 可愛いー」

「えっあ、ちょっと、昨日拾って、間違って連れてきちゃって……」

「ちょっと、抱かせて、貰ってもいい？」

「どこで拾ったの。」

「夢谷君、猫好きなの？」

「夢谷、お前、学校に、猫連れてきちゃ駄目だろ。」

次々、話しかけられる俺。時田の方を見ると、そんな俺を見てアイツは、笑っていた。

「なんだ、夢谷って、ただの、なんか暗い奴かと、思ってたら、お前、結構面白い奴だな。」

「ねーねー。この子名前なんて言うの。」

俺は、今まで、話した事無い奴とも、話す事が出来た。

（きっかけがあれば、こんなに話せるモノなんだな。）

その日俺は、ムーが見つかり担任に怒られたが、クラスのみんなと、少しずつだが打ち解けることが出来た。

つづく

第二十五話　べっ、別にアンタの為に作ってきたんじゃないだからね！（前書き

感想、アドバイス、お待ちしております。

第二十五話　べっ、別にアンタの為に作ってきたんじゃないだからね！

今は、6月の頭。曇り空のじめじめした空気がたちこもる今日の頃。今日も俺は、時田と一緒に登校していた。

「はあくはつきりしない天気ね」

「しかたないだろ、こないだ梅雨入りしたばかりなんだから」

そんな、何気ない会話をしていると、登校途中にあるコンビニの前にさしかかった。

「時田、ちょっと、待っててくれ、俺、昼飯買ってくるから」

そう言っつて、コンビニへ向かおうとしたが、そんな俺を時田が引きとめた。

「今日は、買っつて来なくていいわよ」

「えっ、なんでだよ？」

「いいから、早く学校へ行くわよ！」

そう言いわれ、俺は、腕を引っ張られ、コンビニを後にした。

そして、昼休み。いつものように、中庭のベンチに座る俺と、時田。

「はい」

時田は、俺にお弁当を差し出した。

「えっ、コレを俺に？」

「そうよ！別にアンタの為に作っつて来たんじゃないんだからね！少し、笑いながら、言う時田。

（この顔は、絶対何か裏がある）

「何、いらないの？」

「いや、ちゃんと、いただくよ」

俺は、時田から弁当を受け取り、蓋を開けると、中には、いろいろ豊かなおかずが入っていて、とても美味しそうだった。

「おっ、美味そうだな、ホント、お前は性格の割に、こういうのはマメだな」

「それほどで——それって、褒めてんの？ 馬鹿にしてんの？」

「褒めが、48・7% 馬鹿が、51・3%ってとこだな」

俺がそんな冗談を言つと、時田がポケットからあるモノを取り出し、俺の口に入れる。

「夢たに〜お弁当と、鉛玉、どっちが好き？」

俺の口に拳銃を入れて、笑顔で聞く、時田。

「ふえんとう、ふえんどう（弁当、弁当）」

「よろしい！」

俺の口から、銃を出した。

「時田、それ、偽モンだよな……」

「さあーね」

そう言つて、時田は、銃を閉まった。

（コイツ、本物持つてるからな、後で、この銃後で調べて置こう）

「じゃあ、改めて、いただきます」

久々の他人の手料理は、冷たい筈の弁当に温かみが感じられ、時田の弁当は、予想以上に美味しかった。

「予想以上に、美味しいな」

「そお、ありがと」

少し赤くなつて、照れている時田。

「アンタが食べたいなら、これから毎日作つて来て上げてても良いわよ」

「ホントか！？　じゃあお願いするよ」

「ただし、条件付きでね」

「条件？」

「何だよ、条件つて」

俺が、時田にそう聞くと、時田は、立ち上がつて、自信ありげにこう言った。

「次の時間になれば分かるわ！」

それ以上条件の事を聞いても、教えて貰えず、この昼休みは、終わった。

つづく

第二十六話 学生の本分（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第二十六話 学生の本分

時田と、お昼を食べ終わった、次の時間、数学。こないだやった、五十点満点の小テストが返された。

クラスメイトに数学の教師が、テストを返し終り、教卓の前で話を始めた。

「みんな、分かっていると思うが、明日の土日を挟んで、月曜日には、高校に入つての初めての、中間テストだ、くれぐれも赤点など取らないように。ウチの学校は、赤点を取ったら、課題と、追試をして貰う事になっている。まあ、小テストの平均が三十点を超えているので、数学ほとんどの者が大丈夫だと、思うが、心配のある者は、数学に限らず、この土日ですっかり復習しておくように、分かったな。」

「このクラスでこの小テストで満点を取ったのは、夢谷だけだ。みんなも、夢谷を見習って勉強しろよ」

「……おお……」

クラスの視線が、俺に集中した、最近、クラスのみんなとも話しをするようになってきたが、こういう場面で、名前を出されるのは、やめてもらいたい。

そして、数学が終わった次の時間の休み時間、時田が俺の席に来た。

「夢谷、やるじゃない、満点なんて」

「別に、まぐれだよ」

俺は、軽く言って、時田に聞いた。

「お前は、何点だったんだよ？」

「えっ！」

表情を曇られる時田。

「はーん、さては、平均よりも大分低かったんだな、いつも寝てばかりいるからだよ、で、何点だ、二十点位か？」

時田、俺から、目を逸らしながら、小さな声で言った。

「――点」

「えっ？　なんだって？」

「だから、七点だって！」

（七点？　七点って、7点だよな、単純に百点満点で計算すると十点……この学校の赤点は、四十点だから、残り、二十六点足りない、しかもこれは数学だけで、他の教科は一体どうなっているんだ？）

俺は、時田の肩に優しく手を置き、笑顔でこう言った。

「来年は、お前後輩だな」

時田は、肩に置いた俺の手を払いのける。

「冗談言ってる、場合じゃないのよ！　だからアンタに勉強を教えて貰いたいの！」

「お前、さっきの弁当の条件って」

「そうよ、アンタがアタシに勉強を教えるのが、条件よ。言っとくけど、アンタに拒否権は、無いから、さっき、お弁当食べたでしょ、アレも報酬に入ってるんだから！」

（そうか、別にアンタの為に作って来たんじゃないんだからね！　ってそう言う意味だったのか）

「マジで、ヤバいから、今日から、アంతタの家で、教えてもらおうからね!」

「仕方ない、付き合うか」

つづく

第二十七話 勉強会（前書き）

感想、アドバイス、お願いします。

第二十七話 勉強会

そして、放課後、学校が終わってから時田は、自分のアパートへ戻り、必要な物を取って来ると言って、アパートに帰り。俺は、時田が来るまでに、部屋掃除をしていた。

しばらく経って、階段を上がる音が、聞こえて来た。

（タツタツタツタ！）

「来たな」

「ムー、夢谷、お待たせ！」

勢い良く、ドアを開ける時田。

（ガチャ！）

「アレ？」

ドアには俺があらかじめチェーンを掛けていて時田は、ドアを少ししか開ける事が出来なかった。

（ガチャガチャガチャ！）

「ちよつと、夢谷、コレ外しなさいよ」

俺は、ドアの前に立ち、時田に話し始めた。

「時田、友達の家に来た時は、いきなり、ドアを開けない。来たらまずインターホンだ」

「仕方ないわね」

時田は、ポケットから銃を取り出すと、チェーンに銃口を当てる。

「撃ち抜いていい？」

笑顔で聞く時田。

「ふざけんなお前！ 分かった、分かった、開けるから待ってる」

俺は、仕方なく、ドアを開けた。

「たく、お前は、ホントにやりかねないからな」

「ムー！ 相変わらず、良い毛並みしてるわね」
「にゃー」

部屋に入ったとたん、ムーに抱きついたが、俺ムーを取り上げた。
「はい、アニマルタイムは、終了だ、お前の実力が知りたいから、ちよつと、コレやつて見ろ」

俺は、去年の中間テストの用紙を時田に渡した。

「コレどうしたの？」

「クラスの塾に通っている奴から貰ったんだ、塾で対策として貰ったから俺が、出来の悪い奴の勉強を教えてやらないといけないと、愚痴っていたらコピーしてくれた」

「へえ」アンタも結構、クラスになじんできたわね」

「まあな」

「じゃあ見せてあげるわ！ アタシの実力を！」
用紙を受け取り、テーブルに向かう時田。

「数時間後」

（きゅっ、きゅっ）

五教科全ての丸付けが終わった。

「ふっつ」

「どうだった？」

俺は、立ち上がり、雨が降り出した、梅雨空を見て言った。

「来年、二年に上がる時は、三十九人か、寂しくなるな……」

「どう言う意味よそれって！」

「決まってるだろ！ 数学21点 現国34点 英語28点 世界史31点 物理22点だぞ！ これでどうやって進級するつもりだよ！」

「仕方ないでしょ！ アタシ最初の二週間入院してたんだから！ 学校行ったら授業が全く分からなかったのよ……だから」

「だから？」

「睡眠学習に励んで……」

下を向いてちっちゃくなる時田。

「たく、だったら、こんな間際になって言わないで、もっと早くから、言えば良いモノを」

「だって……」

「まあ、土日をしっかりやれば、赤点回避位は、何とかなるだろう」

「ホント！？ ああ、じゃあ、もう今日は、八時を回ってるし、今日の所は、帰ってまた明日——」

俺の話を遮って、時田が言ってきた。

「えっ？ アタシ今日は、帰らないわよ」

つづく

第二十八話 『とんかつ』（前書き）

時田可憐 「べつ、別にお気に入りで、登録されたいなんて思っ
てないんだらね！」

夢谷信哉 「そんなツンデレキャラでここまで読んでくださった読
者様が落ちるとでも思っているのか？」

可憐 「何よ、夢谷、じゃあ、アンタ良いアイデアでもあると言
うの？」

信哉 「モチロンだ、まず、お前が、服を脱いでエロトークでもす
れば、きっとこれを読んで下さっている読者様は、お気に入り登録
どころか、小説の評価もして下さるににがいな——」

「バン——！」

信哉 「なんじゃこりゃあああああぐはっ」

「ばた！」

可憐 「オホン！ それじゃ、皆様、本編をどうぞ！」

（注意、コレは、本編のフィクションです）

第二十八話 『とんかつ』

「えっ？ アタシ今日は、帰らないわよ」

「はあ？」

困惑する俺。

「だって、今日帰って、また明日来るのもめんどくさいし、そしたらずっとムーと一緒に居られるしね。」

そう言って、ムーを抱く時田。

「まあ、お腹も空いて来たし、アンタには、結構世話になってるから、晩御飯は、アタシが作るわ」

そう言つと、時田は、ムーを置いて、台所へと歩いて行く。

「おいおい、ちょっと、待てよ、若い男女が、一緒の部屋で寝泊まりなんて、青少年として、余り良くないじゃないか！」

「別に良いじゃない、アンタ、アタシに何かするつもりなの？」

「なっ！？ 別にそんな訳ないだろ！」

俺は、顔を赤くして時田に言った、時田は、そんな俺を見て少し笑っている。

「じゃ、良いわね、決まり！」

俺には、時田を止める術など、持ち合わせてなどいなかった。

「じゃあ、冷蔵庫の中を見てもいいかしら？」

「どーぞ」

俺は少し呆れ気味に答えた。

「えーと、豚肉と、キャベツ、卵……よし！ 今日は『とんかつ』にするわね！ 異論は？」

「無い」

そして、今日は、晩飯は、『とんかつ』に決まり、時田の作った『とんかつ』を俺は、味わって食べた。

「はぁ〜美味かったよ」

食べ終わった、俺と時田は、食器を流しへ持って行っている。

「はぁ〜揚げ物作ったら、汗が凄いわね、この後、お風呂借りて良いかしら？」

「ああ、良いよ、俺はちょっと、コンビニへ行ってくる」

「何を買ってくるの？」

「漫画雑誌」

そして、洗い物が、終わると、俺は、アパートから、少し離れた、コンビニへ向かおうと思い、玄関を出たが、アパートの階段を降りた所で、財布を部屋に忘れていた事に気付いた。

「あつ、仕方ない、戻るか」

（がった！）

階段を上がり玄関を開けたその時！俺の瞳に映ったモノは……上から、柔らかそうな胸の膨らみに、キュッとくびれた、お腹周り、そして小さく桃のようなお尻。

「「あつ！？」」「」

「「……………」」「」

「すいません、間違えました……」

「きちゃちゃちゃちゃー！」

ドアの向こうから、時田の悲鳴が聞こえて来る。

（どっする？ どっする？ どっする？ どっする？ どっする？

第二十九話 『メンチ』（前書き）

可憐 「第一回質問コーナー！ はい、アタシがアンタの自殺を止めます！！ ヒロイン事、時田可憐が今回の司会を担当させていただきます。それでは質問の方に移ります。こないだ、この小説作者の、あひるさんの友達に見せた所、「夢谷信哉ってハッキングまで出来るってハイスペックすぎじゃないかと言われましたが、そこんとこ、どうなんですか？ 夢谷さん？」

夢谷 「はあ、分かってないな、学年トップクラスの頭を持って、いる、友達の居ない男が、パソコンにはまり出したら、いつの間にか凄腕ハッカーになってもなんら不思議じゃないだろ？」

可憐 「え」と、ぼっち時代が生み出した、この時代の脅威。それが、夢谷さんな訳ですね？」

信哉 「人を犯罪予備軍みたいに言うな」

可憐 「だって、人の個人情報とか一発で調べられそうじゃないですか」

信哉 「それは、俺が悪いんじゃない、個人情報が無数に在るネットがいけないんだ」

可憐 「責任転換ですね、どうせ、夢谷さんは、厨二病をこじらせて「あれ？ 俺、ハッキング出来んじゃないか」とか思ってそんなスキル身に着けちゃったんじゃないんですか？」

信哉 「ドキ！ ち、ちがうぞ、そんなんじゃないぞ！ え」と今

日の質問コーナーはここまで、さあ、皆様、本編へどうぞ！」

第二十九話 『メンチ』

部屋に連れ込まれた俺の今の状況は、最悪だ。正座をした俺の前で、時田が物凄く怖い笑顔で俺を見つめている。

（今のコイツのメンチならマフィアでさえ道を開けるぞ！）

「何か言う事は！」

「えつとですね、コンビニへ行こうと思って、アパートの階段を降りていたのですが、財布を忘れてしまい、部屋に戻ってきたら、可憐さんが……」

「ふん、で!!」

鋭い視線で、俺を睨む時田。

（まずい、この状況をどう回避する!? そうだ! 下手に出ないでもっと――）

俺は、立ち上がり時田にこう言った。

「時田だって、風呂に入っただばかりの筈だろ、何で裸で部屋に居たんだよ!」

「うっ、それは、脱衣所に着替えを持って行くのを忘れたから、それを取りに行った時に、アンタが帰ってきちゃったのよ!」

「だったら、お前にも、落ちが在った事だ――」

「ん?」

俺は、時田と話している途中、ある場所に視線が行ってしまった……時田も俺の視線に気づき、視線を追う。

俺が気づいてしまったモノそれは、Ｔシャツに浮かんだ、二つの突起だった。

「「あ……」」

「きゃあああ！！ このバカ、変態！ さっさとコンビニへ行つて来い！！」

（ドカ！）

「ぐあ！ 痛ててて」

俺は、時田に蹴飛ばされ、玄関の外に追い出された。

「確かに、俺も悪かったと思うが、やり過ぎだろ……」

俺は、体を起こし、階段を降りて行くと、大家のおばさんが、雨空を見上げていた。

「こばんは」

俺は、挨拶をしながら、ぺこりと頭を下げた。

「あら、夢谷君、こばんは、今日は、可憐ちゃんが来てるの？ さつき元気な声が聞こえて来たけど」

「ええ、そうなんですけど、ちょっと、怒らせちゃいまして」

俺は、少し苦笑いをしながら、大家さんに言った。

「そう、そんな時は、女の子には、プレゼントなんかをやるの良いわよ、そう言うのに女の子は弱いから」

大家さんは、優しい声で俺に言った。

「でも、俺、そんなお金持って無いですし」

「いいのよ、値段なんて、気持ちがこもった物なら、きっと可憐ちゃんも喜ぶわよ」

「そうですかね」

「そうよ」

「分かりました、少し考えてみます、ありがとうございました」

俺は大家さんにそう言って、傘を差しアパートを後にした。

つづく

第三十話 クレーンゲーム

アパートを出た俺だったが、コンビニには向かわず、とりあえず、この町の繁華街のほうへ向かった。

「うーん、時田が喜びそうなモノか、難しいな」

歩きながら、考える俺。

「モデルガンとかエアガン、ガスガンが喜びそうだけど、却下だな、俺の命が危険にさらされる可能性が在る、他に思いつくのが、ミリタリー系の雑誌？ いや駄目だ、アイツの犯罪行為に拍車をかけてしまう。となると……」

俺は、ゲームセンターの前で、あるモノを思いついた。

「そうだ！ めいぐるみだ！ アイツは、何気に動物好きだから、何か、動物のめいぐるみの景品があれば」

俺は、ゲームセンターの中へ入り、中を見渡した、すると、クレーンゲームで白色と黒色の丸い猫のめいぐるみを見つけた。

「これだ！」

二十分後

俺は、大きな袋を抱え、ずぶ濡れになりながら、アパートへ向かっていった。そして、俺は、アパートの自分の部屋のドアに立つと、一応、インターホンほ鳴らした。

「ちよつと、夢谷、コンビニへ行くって言ってた割に、遅かったじゃない——」

ドアを開けながら、話す時田。

「！？ ちよつと、びしょ濡れじゃない、それにその大きな袋は何？」

「ああ、コレか、お前にプレゼントだよ」

俺は、部屋に入って、袋から、大きな黒い猫のめいぐるみを取り

出し、時田に渡した。

「あつ可愛い〜でも、アタシに？ 何で？」

ぬいぐるみを抱きながら、笑顔で聞く時田。

「さっきの詫びだ、これで、勘弁してくれ」

「まあ、アンタがそこまで言うなら、許してあげるわ」

（ぬいぐるみグツチョブ！）

心の中でガッツポーズをする俺。

「じゃあ、俺は、風呂に入るわ、ずぶ濡れだし」

「そう、行つてらっしゃい、アタシは、ムーと遊んでいるわ」

「ニヤー」

そして、俺が、脱衣所に入ると、俺は、あるモノを見つけてしまった。

それは、脱衣籠に入った、水色のブラや、白と水色の縞パンが……

「はうつ」

「時田ー！」

俺は、部屋に戻り時田に言った。

「自宅じゃないんだから、アレ何とかしろよ」

俺は、顔を赤くして、脱衣籠を指さす。

「あつ、きやああああ！」

「たく」

その後、俺は、風呂から出て時田と、会話をしていると、時田の携帯が鳴った。

「あっメールだ」

「あれ？ その着うたって」

「そ、アンタがいつも聞いているバンドの曲よ、アタシも気にいったから、メールも電話も全部『コレ』にしたの」

その後も、会話を続けた、俺だったが、一つ重大な事に気付いた。
「お前、今日どこで寝んの？ おれの部屋見ての通り、ベッド一つしかないけど」

「あつ……布団とかないの？」

「独り暮らしで、友達も、こないだまで、居なかった俺に、余分な布団があると思うか？」

「仕方ないわね、じゃあ——」

そして、就寝。

何故こうなった？ 俺は今、時田と同じベッドで、寝ている。俺は顔を壁側にして、この妙な空気に堪えていた。

「ねえ、夢谷」

「うん？」

「アンタの目にアタシは、どう映ってる？」

「無鉄砲で、お人よしなバカ、かな」

「それ、褒めてるの？ 馬鹿にしてるの？」

「褒めが82.7% 馬鹿が17.3%ってとこかな」

「すーすーすー」

話している内に時田は、寝てしまった。

「寝付きの良い奴だな」

そして、しばらくすると、時田の寝言が、聞こえて来た。

「あいか……あいか……ごめんね、ごめんね……」

俺は、コイツの事をほとんど知らない、何故、こんな能力を持っているのか、何故、自分を犠牲にしてまで、他人を助けようとするのか、家族は？ 中学の頃は？ 考えれば考えるほど疑問が浮かんでくるが、まだ『それ』を俺が聞くのは、早い気がしたし、少し怖かった。そんな事を考えている内に俺も、いつの間にか、寝てしまっていた。

つづく

第三十一話 結果発表

そして、中間テストが終わった数日後、テストを返された時田は、意気揚々俺の机に向かつてきた。

「で、どうだったんだ？」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれた、見よ、アタシの実力を」
（バツ！）

俺の机に並べられる、五枚の答案用紙。

「どれどれ」

「数学48点 現国57点 物理50点 英語51点 世界史55点……」

「どう、凄いでしょ！ 余裕で、平均五十点行ったわよ」

時田は、自信ありげな表情で、俺に行ってくる。

「へえ〜そうだな〜、最初に比べたら、凄く進歩したじゃないか（棒読み）」

（金土日とあれだけ、勉強を教えて、この点数か……ちょっと悲しくなるな）

「アンタは、どうだったの？」

「俺？ 俺は、普通だよ」

「ちょっと、見せなさいよ」

そう言つと、俺が机の中にしまった、答案用紙を時田は、引つ張り出しやがった。

「よっと！ どれどれ えっ！？」

俺の答案を見て、驚いた顔をしている。

「どうした？」

「数学100点 現国98点 物理100点 英語99点 世界史99点。合計えくと、496点これのどこが普通のなのよ！」

（バン！）

机に答案用紙を叩きつける時田。

「中学の時もそんなもんだったから、俺にとっては普通なんだよ」

「そう言えば、アンタ、中学の時学年で、一番にもなった事あるのよね」

「ああ、一回だけな」

「毎回こんな点数取ってるんじゃ、もっと一番になった事があってもおかしく無いじゃないの？」

「俺の中学には、俺と同じクラスで、全国模試で一位になった事もある奴がいたから、俺はいつも二番だったんだよ、俺が一番になった事があるのは、そいつが、欠席でテストを受けなかった、一回だけだ」

「ふーん、でも、高校じゃ、この点数だと、一番を狙えるんじゃない？」

「無理だな」

「えっ、どうして？」

驚いた顔で聞く時田。

「だって、ソイツ、この学校に居るからな」

三日後

学校の廊下に、こないだの中間テストの上位30位のクラスと名前が貼り出され、俺は、時田に連れられ、それを見に来ていた。

「どれどれ」

貼り出された、プリントを見る時田。

「3番480点、山田大貴　2番496点、夢谷信哉……1番500点!? えっと、いじゅういん? ??」

「伊集院 優琉だ」

俺は、読めなくて困っていた、時田に1番の名前を教えてやった。「すぐるって読むのか」アンタ良く読めるわね」

「ソイツが、俺と同じ中学で、全国模試で1位になった事がある奴だよ、それにしても、また満点か、相変わらず、すげえ」

「上には、上が居るって事よ、アンタも自分の力を過信しちゃだめよ」

「お前が言う事が!」

（バシ!）

「痛たっ!」

俺は、軽く、時田の頭をチョップする。

「お前も、これからは、ちゃんと授業受けるよ、分からないところは、教えてやるから」

「わかったわよ」

頭を押さえながら、返事する時田だった。

つづく

第三十二話 夏休み！

（あつ、暑い。まるでサウナだ）

中間テストが終わってから何事も無く時は過ぎ、今日は、一学期の終業式、つまり明日から、夏休みだ。今、俺は、体育館にクラスごとと整列させられ、校長のつまらない演説を右から左へと受け流している所だ。窓を開けても、今日の最高気温は34、そして、この体育館に数百人も詰め込まれては、さすがにまいる、早く帰って、クーラーの利かせた部屋で寝たいものだ。

「——であるから、夏休みだからと言って、羽を外しすぎないように、勉強に勤しんで下さい」

「校長先生、ありがとうございました。次は、生活指導の、竹沢先生の話しです」

次は、竹沢の話しか、さつさと、終りにしてくれ。

「えー最近、この町で、違法な薬物が多く出回っています。この学校では、まだ捕まった者は、居ないが、この町の者、特に学生が、去年を大きく上回るペースで検挙されている、君達は、甘い誘惑をされても、絶対にそんなモノに手を出さないよう、注意して貰いたい。」

以上だ」

（ふーん、薬物が出回っているか）

そして、放課後。今日学校は、終業式という事もあって午前中で終わり、俺は、いつものように、時田と一緒に、下校している。

「ねえ、お昼もまだ食べて無いし、どこかでごはん食べてかない？」
時田が、歩きながら、提案する。

「ああ、別に良いけど、何、食うんだ？俺は何だっていいぞ」

「そうね」

人差し指を口当て、上目づかいで考えている時田。

「じゃあ、あそこにしましょう!」

俺と時田は、初めて逢った日に行った喫茶店に行く事にした。

「喫茶店」

メニュー表に目を通す俺。

「へえ、ここって、ランチとか普通に飯もやっているんだな」

「ええ、ファミレス程、種類は無いけど、ここの料理は、おいしいわよ」

そして店員が、俺達のテーブルに注文を聞きにやって来た。

「アタシは、サンドイッチと、コーンスープ」

「じゃあ、俺は、オムライスで」

「かしこまりました」

そして、十分程経って、俺達のテーブルに頼んだモノが運ばれてきて、俺と時田は、食事を始めた。

「もう、一学期も終わりか、なんだかんだで早かったな」

俺は、オムライスを食べながら、時田に話しかける。

「そうね、確か、アンタと初めて逢った日も此処に来たわよね?」

「ああ、俺にとって、一生忘れる事の出来な衝撃的な一日だったよ」
俺は、少し、からかう感じで、時田に言う。

「そうよね、自殺願望が分かる人に逢うなんて、そりゃ衝撃的よね」

（いやいや、違っだろ、俺が衝撃的だと言っているのは、お前との出会い方だよ！ いきなり口に初対面の奴に、銃を突っ込まれたんだぞ俺は！）

「ありがとうございました」

「ふう、お腹いっぱい、おいしかったわね」

喫茶店を出て、お腹を押さえながら満足げな表情をする時田。

「ああ、そうだな」

「この後どうする？」

俺は、携帯を開き時間を確認した。

「そうだな、時間もまだあるし、駅の近くの繁華街でも行くか？」

「そうね、そうしましょう」

そして、俺達は、繁華街へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3033y/>

アタシがアンタの自殺を止めます！！

2011年11月25日17時51分発行